

生き方の選択

未来はきつと希望に満ちている

10年後の私へ

小

学生のころ、少年サッカークラブに所属しながら柔道を始め、中学3年生の宗像地区中学校柔道大会で団体優勝という結果を残した佐々木さん。中学2年生のころ、新型コロナウイルス感染症が流行し始め「コロナ禍で息苦しい生活になった。昨年の中学校柔道大会は中止となり、他の試合もほとんどが規模縮小や中止になった。ほとんど試合することができなかった」。中学校生活の半分以上を、どこにもぶつけない不安やストレスを感じながら過ごさなくてはなりませんでした。

次の春には、高校生としての生活がスタートします。「高校生になって、今まで全く知らなかった人たちと出会い、新しい環境の中で自分はうまくやっていけるのか」「10年後、ちゃんと生活できているだろうか」。

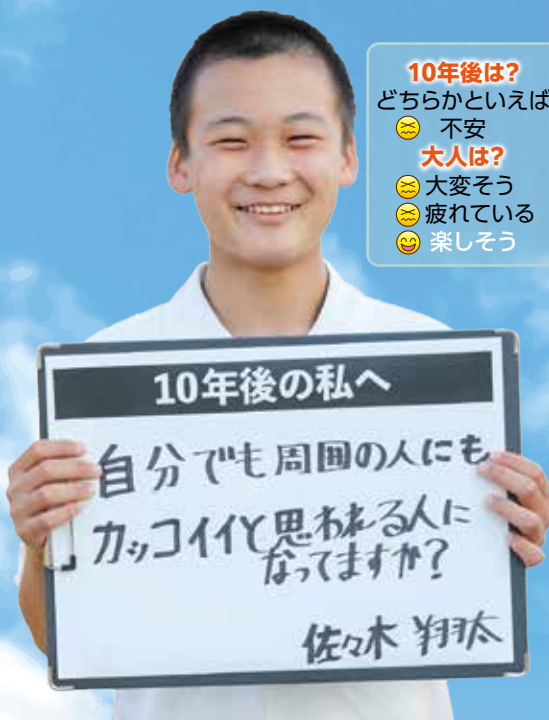
礼儀正しく、誠実な受け答えをする佐々木さんの口から、いくつもの不安の言葉が出てきました。しかし、高校や大学への進学、就職など、新しい生活の始まりに不安はつきものです。そして、乗り越えていかなくはなりません。

将来を不安に思う半面、佐々木さんには、高校卒業後、警察官になりたいという明確な目標があります。「敬礼をしたら返してくれるたり、おじいちゃんが道に迷って困っていたら優しく道を教えてあげたりしている警察官を見たことがある。本当にかっこいい」。小学生のころから憧れていた警察官になることを目指して、これからも自分の信じる道を全力で進んでいきます。

今できることを
全力でがんばる

中学3年生 佐々木翔太さん

10年後は？
どちらかといえば
不安
大人は？
大変そう
疲れている
楽しそう



「10年後の未来に自分はどんな生活しているだろうか」市内の中学生や高校生は、不安な気持ちを抱えながらも、理想とする将来を思い描いていました。



周りの人が笑顔になれる
仕事がしたい

高校1年生 戸畑優衣さん

10年後は？
どちらかといえば
不安
大人は？
大変そう
疲れている
楽しそう

子どもと遊ぶことが好きだという戸畑さん。親戚に幼い子どもが多く、親族が集まったときに一緒に遊ぶことが楽しくて、保育士になりたいという夢を抱き始めました。運動が大好きで、中学生のころは陸上部に所属し、100m走で14秒を切るほど運動能力が高い戸畑さん。小学生のころテニスクラブに所属していた経験を生かし、高校でもテニスをしています。

そんな活発な戸畑さんですが、10年後の自分の姿を想像してみると「保育士になる夢はかなえられない気がする」と不安を漏らします。「新型コロナウイルス感染症の影響で、人との関わりも少なくなってきた。この時代に、自分が進むべき道をうまく見つけられない気がする。どうすれば保育士になれるのかも分かっていないから」。コロナ禍はいつ収束するのか、大人になったときも残っているのではないかという不安と、就職というまだ具体性のない未知の世界に不安を感じざるを得ません。

「以前、兄が漁業関係の仕事をしたとき、いつも機嫌が悪くて、ため息ばかりついてた。その仕事はあまり続かなくて、今、兄は幼稚園の先生の補助をしている。兄も子どもが大好きなので、今はすごく楽しそう」。兄の姿を自分に重ね「子どもたちと触れ合いながら周りの人が笑顔になれる仕事がしたい」と理想の将来像を語ります。「きつと楽しいことばかりじゃない。でも、嫌なことにもめげずにがんばりたい」としっかりと現実を見据え、前を向きます。

今の大人に対して

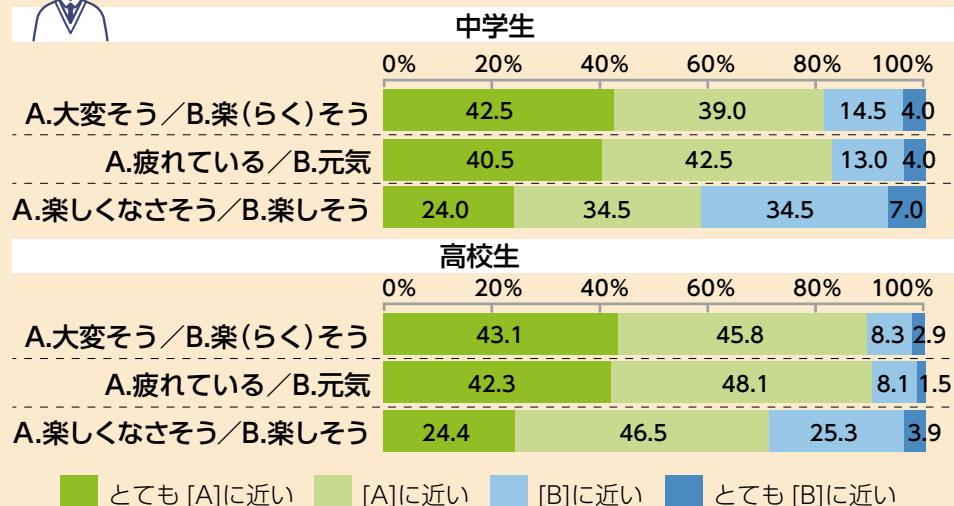
中学生は
81.5%が大変そう
83%が疲れている
58.5%が楽しくなさそう

高校生は
88.9%が大変そう
90.4%が疲れている
70.9%が楽しくなさそう

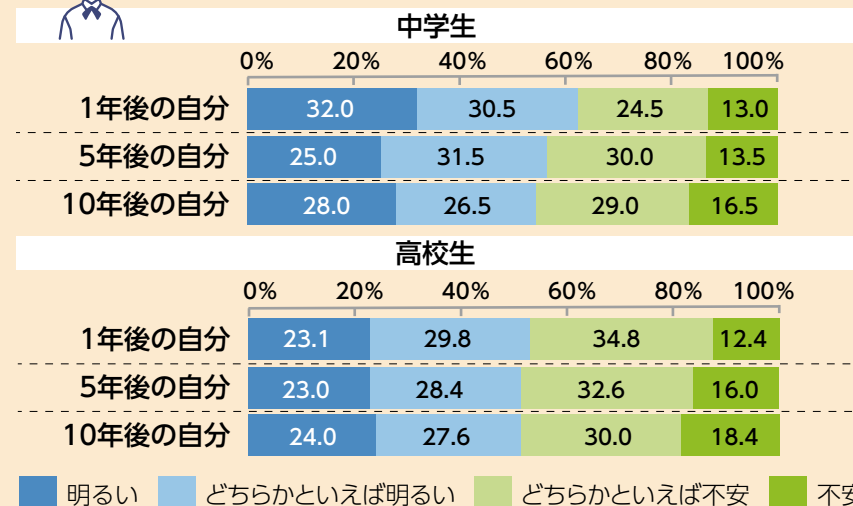
という
イメージを
抱いている……



今の大人に対して、抱いているイメージは[A]と[B]どちらに近いが[各単一回答形式]



自身の将来について、明るい見通しをもっているか不安を抱えているか [各単一回答形式]



「未来はきつと希望に満ちている」
その思いを伝えるために



▲クリームスイカ出荷までの流れ。
①荷下ろし⇒②計量⇒③分別⇒④仕分け⇒⑤出荷の順番でスムーズに作業が行われていく

出荷をやり終えたとき「やっと終わった」と思える瞬間がある

店先に並べると瞬く間に完売
6月中旬の早朝、午前7時。坂田さんが始業のベルを鳴らし、出荷作業が始まりました。トラックの荷台から、次々とクリームスイカを転がし、外見の確認や、ポンポンと軽くたたくことで実の成熟具合を確認していきます。「良」「優」「秀」の3つの品位に分けられ、はかりに乗せて重さを計ったクリームスイカは、宗像農業協同組合の若手職員の手でバケツリレーのように手際よく運ばれ、箱詰めされていきます。

作業が一段落し、少し休んだ後、ふれあい広場ふくまへ出荷。いざ、クリームスイカを降ろして店先に並べ、店長がクリームスイカに値札を貼ると、今か今かと待ちわびた買い物客が次々に手を伸ばし、瞬く間に完売してしまいました。

支えてくれる家族の存在



▲ふれあい広場ふくまに並べられたクリームスイカ

「毎年毎年この作業の繰り返し」と話す坂田さんは、高校を卒業してすぐに農家として働き始めました。「色々とアルバイトをしたこともあったけれど、親が年を取って農業ができなくなってきたので、自分がやるしかなかった。でも元々、農家に生まれたからには、後を継がなければならぬという思いはあった」。半ば逃れられない宿命のようなかたちで始まった農家としての生活は苦しいことばかり。でも、それ

クリームスイカ農家

福津で働く vol.1

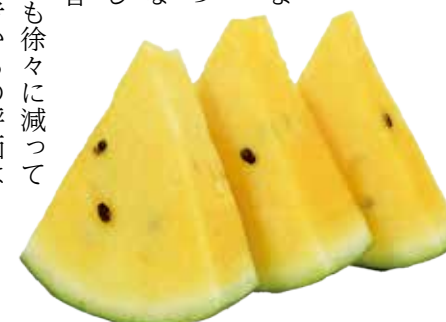
Masami Sakata 坂田 正美

農家に生まれた宿命を背負って

生産者が減少し、後継者もないクリームスイカ農家。残り3軒となり、高齢化はますます深刻に…。苦しいながらもクリームスイカを作り続け、後に続いてほしいと願う坂田さんの思いとは。

福津市内殿でクリームスイカを栽培する坂田正美さん。宗像農業協同組合クリームスイカ部会の部会長を務めています。鮮やかな黄色い果肉と爽やかな甘みの特徴のクリームスイカは市の特産品。しかし、生産者の高齢化が進んだことに加え、皮が薄く割れやすい特徴があることから栽培が難しく、徐々に生産者は減り、以前30軒近くあったクリームスイカ農家は3

軒となってしまっています。坂田さんは「いつまで続くか分からない」と不安を漏らします。ただ、生産者数に合わせて生産量も徐々に減っていったものの、消費者からの評価は高く、出荷時期のふれあい広場ふくまには早朝からクリームスイカを求める人の行列ができます。



仕事をするのは 楽しく生きるため

大学卒業後、小学校で教師をしていた透さん。子どもが好きで教師になったものの、限界を感じて退職し、津屋崎に来ました。

「世の中には、仕事をしていなくていいのに、自分に合っていないのに仕事を続けている人がたくさんいると思う。それは、仕事っていうのはそういうものだとか社会で言われていることが関係しているのではないかなと思う。どんな仕事もつらいつて大人は言うけれど、きつと自分に合う『やりたい』『やっていて楽しい』と思える仕事はあるはず。『つらい』は大好きなことなら『きつい』『つらい』にならないと思うから。やりたくない仕事で悩み続けるより『合わない』と辞めてしまうことも一つの方法だと思う。自分に合う仕事はきつとある」。

「これまで、移住を考えてまち歩きにきた人や、何の目的もなく来て、フラッと散歩に行ったと思ったら、藍の家で藍染めの手伝いをしていた人、他にもさまざまな人が王丸屋に泊まっていった。そんな風に、泊まってくれた人が津屋崎のまちの良さを体感して『ここにきて良かった』と言ってもらえたときは、この仕事を



していい良かったなと思う。でも、やっぱり生きるため、収入を得るために仕事をするのが大前提にある。楽しく生きるのが人生の目的」。

自然体で本音を語るその言葉に嘘偽りはなく、自らの体験と照らし合わせ「人生にはルールなんてなくて、決まりもない。将来の夢はいつまでも持つていいと思うし、現実には好きに変えられる」という思いを王丸屋に訪れた若者に話します。

やりたいことが 津屋崎のためになれば

透さんは、津屋崎に興味を持ってもらおうと、ユーチューブチャンネル「ツヤツヤ津屋崎」で情報発信をするユーチューバーです。

「海や川で泳ぎたい、写真を撮りたい、イベントを企画したい……。言い出せば切りがないほど、やりたいことがたくさんある。時間があれば動画の撮影に行ったり、海に泳ぎに行ったりしている」と自由気ままに生きる透さん。

「動画の撮影も編集も、基本的にはやりたいからやっていて、王丸屋や津屋崎のプロモーションと考えれば仕事ということにもなる。やりたいことなら、きつくて、楽しく作業できるから」。祖母の家があった津屋崎は、今や自分のまちとなり「や

「きつい」＝「つらい」にならないから仕事として続けられる

「やりたいこと」は津屋崎の活性化につながっている。

「お金で買えない幸せがここ津屋崎にはあると思います。ぜいたくはお金じゃ買えないと思っ

ていて、例えば、夜涼しくなる時期に缶ビールを持って、向こうの海岸を歩いてきてくださってよくお客さんに勧めています。波の音がするのは全部自分のためだと思えるし、星空も景色も全てお金はかからなくて、海に向かって大声

で歌っても、叫んでも、誰の迷惑にもならない。それが最高の『タダ』でできるぜいたくだと思う。津屋崎にはそういうものがたくさんあって、普段から近所のおばちゃんたちが食べ物をお裾分けしてくれたり、今もこうやって高校生と話したりで

▼動画の編集をしながら訪れた地元高校生と楽しそうに話す透さん（右）



きること考え方によっては、ぜいたくで幸せだと思う。訪れた宿泊客と夜通し話したり、一緒に海に行くこともあるという透さん。「楽しく働く」ことを貫く、その人柄には不思議な魅力があり、今日も王丸屋には若者が集います。

空き家となっていた王丸屋を自費で改装したのは母の富永由紀子さん。木曜日は由紀子さんが担当する日で、同世代の人がよく訪れます。「王丸屋を透に任せて良かった。透が経営することで若い世代の人が集まり、まちに活気が出る。お話ししたり、カードゲームをしたり、漫画を読んだり…みんながくつろげる空間が提供できている」。今の王丸屋の姿に満足気な由紀子さんは、うれしそうに笑顔を浮かべます。

民泊経営者 YōuTuber

ユーチューバー

福津で働く vol.2

Toru Kosai 小才 透

人生にルールはない 現実を変えられる

ユーチューブ

コミュニティカフェと民泊を営む傍ら、YouTubeチャンネル「ツヤツヤ津屋崎」で津屋崎を中心に情報発信をする小才さん。自由気ままに楽しく生きる、活力の源は何なのか、その素顔に迫ります。

地域おこし協力隊

福津で働く vol.3

Masahiro Mori 森 昌弘

夢を叶えた後も やりたいことを探している

福津市の食材の魅力を多くの人に伝えるため、商品開発や福津の産品の販路拡大を行う地域商社「福津いいざい」。そこで、地域おこし協力隊として働く森さんは元水族館の職員です。水族館の職員になるという幼いころからの夢を18歳で実現し、26年後に退職。新しい世界で新しい人と出会い「やりがい」を求めて働く、その思いを聞きました。

人が喜んでくれる 感動してくれることにやりがいを感じる

変わらない思い

徐々に売れるようになり、営業も板に付いてきました。商品開発や販路拡大にも励む森さん。「農家や漁師の皆さんと試行錯誤しながら商品開発をして、その商品が売れたらうれしい。それに、小規模だったとしても、新しい販路が見つかったとき、がんばって良かったなと思う」。以前、水族館で働いていたときも「人が喜んでくれる、感動してくれる」ことにやりがいを感じていました。今はその対象が「観客」から「農家や漁師の皆さん」に変わり、福津市のために働くことにつながっています。

「給食を見に来ませんか」。そう誘われて上西郷小学校を訪れた森さん。市内の小・中学校では、福津の食を子どもたちに知ってもらおうと、特産品の鯛を福津いいざいから仕入れ、給食の一品としています。子どもたちに鯛を食べた感想を聞くと、口をそろえて「おいしかった」「もっと食べたい」と言い、森さんは満面の笑みを浮かべます。各学級

▼真剣な表情で児童に向かって鯛の話をする森さん



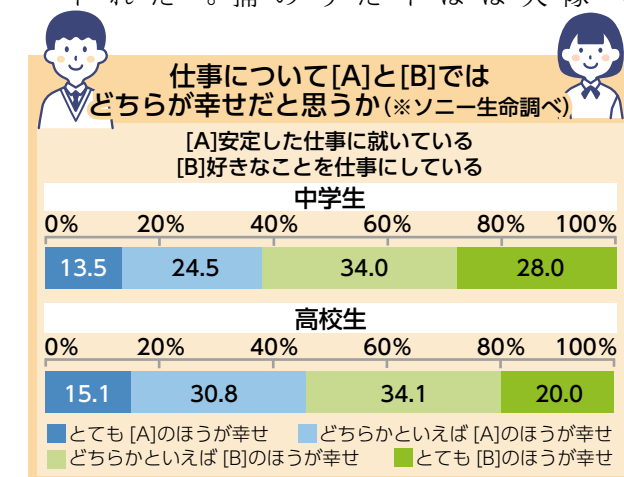
を回りながら、福津では鯛が捕れていることや、鯛が成長するなどのくらの大きさになるのかを分かりやすく説明する森さん。「自分の好きな生き物のことを子どもたちに伝えながら、自分が納品した鯛を食べてもらえる。こんなにうれしいことはない」。その「やりがい」は森さんの喜びと感動につながり、涙が出るほどだと言います。

一度叶った夢。かたちは違えど「人のために働きたい」という森さんの思いは、これからも変わりません。

夢見た仕事で充実した日々

マリンワールド海の中道では、イルカにジャンプなどのパフォーマンスを教え、ショーにも出演するドルフィントレーナーとして20年勤めた森さん。「水族館での仕事は動物が病気になったら昼夜問わず交代で治療に当たるなど、大変だった。でも辞めたいと思ったことはなくて、イルカや他の動物とコミュニケーションをとりながら、楽しく働けることにやりがいを感じていた」。動物と触れ合える喜びを感じながら、それを生業とすることで充実した日々を過ごしていました。京都水族館の

地域商社「福津いいざい」で、2年前から地域おこし協力隊として働く森昌弘さん。生き物が大好きで、小学生のころの将来の夢は「水族館で働くこと」でした。「兄は野球一筋で育ち、親は私にもスポーツをしてほしいと思っていたようだが、何をするより、虫取りや魚取りをするのが楽しかった。よく近所のため池でザリガニやゲンゴロウを捕り、家に持って帰ってきていた」。親の勧めでソフトボールをしていたけれど、好きなのは生き物との触れ合い。高校卒業後、マリンワールド海の中道で働き始めました。



立ち上げにも関わり、合計26年間、夢だった水族館の職員として働いてきました。しかし、最後の1年間はドルフィントレーナーとして働くことができず「このままでいいのか」と自問自答した結果、退職を決断し、福岡に戻ってきました。

その後、野菜のベンチャー企業などで働く中で、森さんは農家の皆さんと働くことに魅力を感じていました。そんなとき、地域おこし協力隊が募集されていることを知り、福津いいざいで働き始めました。しかし、思いの外、鯛茶漬けなどの加工品の営業はうまくいきません。それでも回数を重ね、経験を積んだことで



Workers of Fukutsu 福津の仕事人

市内で、建設、板金、医療、美容、保険など、他にもさまざまな事業を営む商工会青年部の皆さんが、10月に市内の中学校で「福津の仕事人」出前事業を開催。未来を担う子どもたちに対して、市内にどのような職業の人が、どのような仕事をしていて、どのような思いをもって仕事をしているのか、仕事人たちと直接話をする機会を提供。さらに、銅板の折り鶴づくりやりんごジャムづくり、車の整備や美容師体験など、実際に体験することを通して、その仕事の魅力を伝えています。真剣な表情で、時には笑顔で触れ合う仕事人たちの姿勢に、生徒たちの目は輝いていました。



10 月に行われた福津の仕事人では、数人のグループを作った生徒たちと多種多様な職業の仕事人が語り合う場が設けられました。仕事人の皆さんはパソコンやタブレット、印刷してきた紙などを生徒に見せながら、自分の仕事のやりがいや魅力を話していきます。

仕事人の仕事を体験

福津の仕事人の2時間目は体験授業。高校生のとき「かっこいい仕事をしたい」と美容師を志し、現在、美容室「Life Edge」を営む鶴井大樹さんが講師となって、15人ほどの生徒が美容師の仕事を体験しました。

グループで試行錯誤しながらマネキンの髪を切っていく生徒たち。鶴井さんは、時折見本を示しながら、優しく声を掛けていきます。しかし、普段使い慣れていない道具と、髪を切る作業に生徒たちは悪戦苦闘。思ったより髪が薄くなってしまうたり、バランスが悪くなってしまうたりするグループもありました。

それでも、充実した時間を過ごし、表情が明るい生徒たち。鶴井さんが感想を求めると、生徒の一人が「美容師になる」と声を上げます。「まずはやりたいと思うことをやってみて。自分もかっこいいと思って始め

たことが、今は『人を幸せにしたい』気持ちに変わっている。大変なこともあると思うけれど、やりたいことであれば絶対続けられるし、それを乗り越えていってほしい」。鶴井さんは、微笑みながらそうアドバイスし、思い描く未来へのきっかけをつかんでほしいと願っていました。

考えれば考えるほど募る不安

「働くための力、生きるための力は、これから経験する全ての出来事から得ることができる。たくさんの人と出会い、学ぶことがみんなの力になる。大事なのはできるできないではなくて、挑戦すること」。銅板の折り鶴づくりの講師となった松田板金の松田晋介さんは、そう生徒に語り掛けます。

さまざまな職業の話聞き、仕事を体験した生徒たち。将来の希望につながるような前向きな言葉を掛けられた反面、仕事人への質問は「失敗したことはあるか」「失敗したらどう対処するのか」といった失敗することをおそれている言葉でした。「将来、自分が大人になったとき、きちんと働けるのだろうか」。現実的に考えれば考えるほど、不安な気持ちを抑え切れない生徒たちが、仕事人に質問を投げ掛けていました。



福津の仕事人

板金業

Shinnsuke Matsuda 松田 晋介

「挑戦」することが大事

福津の仕事人

美容師

Daiki Tsurui 鶴井 大樹

「やってみたい」を大切にしてほしい

将来なりたい職業（※ソニー生命調べ）

男子中学生		
1位	YouTuberなどの動画投稿者	23.0%
2位	プロeスポーツプレイヤー	17.0%
3位	社長などの会社経営者・起業家	15.0%
女子中学生		
1位	歌手・俳優・声優などの芸能人	17.0%
2位	YouTuberなどの動画投稿者	16.0%
3位	美容師	14.0%
男子高校生		
1位	YouTuberなどの動画投稿者	15.3%
2位	社長などの会社経営者・起業家	13.5%
3位	ITエンジニア・プログラマー	13.3%
女子高校生		
1位	公務員	11.5%
	看護師	11.5%
3位	教師・教員	10.3%



取材を終えて

思い描く未来へ

「少年よ大志を抱け」という言葉があるように、子どもたちには大きな夢と目標を持ち、明るい将来を思い描いてほしいものです。いち大人として、また私自身、3人の子を育てる一人の親として、日に日に成長していく子どもたちを見ていると、心からそう思います。

そんなとき、インターネットで見掛けたのが「子どもたちが将来を不安に思っている」という言葉でした。そのことを知って愕然（がくぜん）とすると同時に、これを市民の皆さんに伝えなければならないと思い、特集を企画しました。

ソニー生命が実施した調査は全国の中高生を対象にしたもので、福津市の中高生で調査した場合、必ずしも同じ結果が得られるとは限りません。しかし、今回取材した2人の中高生は、調査と同様に将来への不安を抱えていて、大人に対してマイナスなイメージを確かに持っていました。

私たち大人は、このことを真摯（しんし）に受け止め、全ての子どもたちが未来に希望を抱けるような社会を築き、子どもたちの良い見本になるべきではないかと思えます。

今回、さまざまな生き方をしている大人たちに触れ、今の仕事をしている経緯や、その思いを聞きました。家業を継がなければならなかった人、働き方や生き方を模索してきた人、その誰もが思い描いた道を一直線に進んできたわけではありません。成功と挫折を繰り返し、時には迷いながら進んできた結果、今の道を歩んでいます。

子どもたちは、これから自分の道を決めるために幾つもの選択をしなければなりません。そのとき、私たち大人に何ができるでしょうか。商工会青年部の皆さんが仕事の魅力や生き方を示しているように、子どもたちとたくさん話をするのが考え方の幅を広げ、選択肢を増やすことにつながると思えます。そして、たくさんの選択肢の中から、自分の進みたい道を選ばせてあげることが大人の役割ではないでしょうか。

生き方は人それぞれで、その選択に正解も不正解もありません。次世代を担う子どもたちが思い描く未来に少しでも近づけるよう、私たち大人が支えていきましょう。

何が自分にとっての幸せなのか、分
かりづらいと思います。地元で自
営業を営みながら、商工会青年部や消
防団として活動する私としては「自
分が生まれ育った地元に貢献しなが
ら生きるの幸せ」だと感じます。
中高生の皆さんは、自分の将来を
どのように描いているでしょうか。
また、将来を想像するとき、思い浮
かべるのは誰の姿でしょうか。それ
は、テレビやインターネット上で活

躍している誰かであり、身近にいる
大人であると思います。どうしても
「疲れている」姿や「大変そう」な
姿を見せてしまう私たち大人です
が、それでも楽しく、一生懸命に生
きていることが「幸せの見本」の一
つとして、子どもたちが「幸せ」を
見つけ出す一助になればと切に願
います。そしてできれば、この福津市
で生きるといふ選択の価値について
も考えてもらえると幸いです。

私は今、宮地嶽神社参道で保険代
理店を営んでいます。大学卒業後、
福岡市内で音楽映像制作の仕事をし
ていましたが、保険代理店を営む父
親の後継者が見つからない状況や、
帰省の度に少しずつ年を取っていく
姿を見ているうちに「自分が後を継
ぐことが使命ではないか」と思い始

この出前授業は「将来、福津市で
一緒に働く仲間を増やしたい」とい
う思いから始まりました。未来を担
う子どもたちに対して、このまちに
はどんな職業の人がいて、どんな仕
事をしているのか。また、仕事のや
りがいや楽しさを体験を通じて直接
伝えるものです。毎年、生徒たちの
キラキラと輝く瞳や、リアクション
に、出前授業のやりがいや達成感を
感じています。

め、27歳のときに実家に戻りました。
「保険の仕事を選んだ」というより
「仲村家を継ぐ」かたちで、この仕
事を始めました。
学生ときはさまざまな「モノ」
「情報」「人」にあふれた東京で生活
することを夢見ていました。しかし、
こうして福津に残ることを選択し、
自分に合った生活環境や人間関係は
自分自身が紡いでいくものだと思い
ました。ここには程よい自然やおい
しい食べものがいとも身近にあり、
家族や社員、地域の皆さんとの良好
な人間関係に恵まれ、とても幸せな
毎日を過ごしています。時には小競
り合いをしたり笑い合ったり、商工
会青年部や消防団の皆さんとは昔か
らの友人のよう
に、とても
気分が知
れた仲間
です。そ
のような
人間関係
は都会で
の生活では得が
たいものでは
ないのでは
ないかと
思っています。

今、時代、価値観は多様であり、
自分にとっての幸せを探して

大人が 「幸せの見本」に なってほしい

福津の仕事人

保険業

福津市商工会青年部部長

Kouichi Nakamura 仲村 浩一